

## <分科会>泉南記録 研究討議会名「高学年 B」

### 「固まった形から～織物アート～」 (北川紗絵先生)

#### ◎反省・感想 (北川先生より)

熊取町の盛んな産業がタオルづくりであることや、タオルが子どもたちにとって身近な物であることから、この題材を選択した。前時の2時間の学習では、「液体粘土でタオルを固める」ことに取り組んだ。郡津小6年の子どもたちは、液体粘土を使用したことがないこともあり、少し慎重に作業し始めたものの、触り心地や感触を楽しみながら、とても意欲的に作品作りに取り組んでいた。材料については、子どもたちならどんなものを必要とするか考える中で、身近に手に入れられるもの、できるだけ廃材を用いること、繰り返し使えるものを意識して準備していた。子どもたちは、何を使おう・・・と迷いながらも使ってみたいものをどんどん手に取り、試行錯誤していた。



本時の授業では、自分で固まった形を見て考える時間、友だちと対話して見方を広げる時間をしっかりとった。土台からはがす時にタオルが固まらず、もとの状態に戻ってしまった子どももいたが、声をかけると「こうしたい。」という思いがあったので、固める段階から再度トライできるよう支援した。本時は、固まった形から考えていく場面であるが、イメージを初めからもって作っている子もいた。ねらいとは違うが、それでも良いのか、それとも違う視点に変えて考えるほうがよいのか。そのような時、どのような声掛けをしたらよいのかという疑問が残った。

#### ◎意見・質問

- ・ 特産品を作品に使ったところがSDGSの観点からも良かった。動物をイメージしている子どもが多かったが、悩んでいる子もいたので、どのような声掛けをすれば良いかと考えた。
- ・ 着色をする際に白い部分が残って嫌だと感じる子どもたちに対してどのように声掛けをすればよいか。→ (北川先生の返答) 白い部分を無くそうと思うと、とても

時間がかかるので画用紙を手渡して、周りの画用紙に着色したり、色がついているタオルを選んだり、部分的に塗ることで一つの表現になることを伝えた。

・かわかす場所をどうしたらよいか。→（北川先生の返答）トレーや段ボールに乗せて乾かした。季節は夏にするのがおすすめ。

## 「墨と水から広がる世界」（万野裕香先生）

### ◎反省・感想（万野先生より）

これまでも取り組んだことのある題材であるが、自分の思うように指導できなかったということもあり、今回は再チャレンジであった。郡津小学校6年生のクラスの子どもたちは「自由に表現することをあまり経験してこなかった」と聞いていたので、前時の1時間は、墨、筆、道具を使って自由に描くことを目一杯楽しんでもらった。本時は、前時にどんな道具を使いたいかが聞いていたため、ローラー、小さい筆、カップを追加した。それらと、墨と水、八つ切と四つ切の障子紙を好きに使って、表現活動に取り組んだ。45分中30分を作業にあてたが、紙を一枚しか使わない子もいた。材料をたくさん用意し、使いたい物を増やすと、「水と墨を使う」というところ



### ◎意見・質問

・子どもたちは全身で楽しんでいました。水と墨で描くための道具をこちらがある程度用意することで、偶然の柄ができることを楽しんでいました。絵をかきたくなるが、「墨と水」を楽しむときにどのように声掛けをしたら良いか。

→実態にないものを表現するという事は難しい。はやい、つよい、こわい、を表現してごらんというと、絵では表現しにくくなるため自由な発想になった。

・あさひも1つでも色々な技法を使っているいろんな描き方をしている子もおり、技能を習得できていると感じた。筆をもつと、絵を描こうとしてしまう子どもたちが多いが、いなかった。どのように声掛けしたのか。

→ (万野先生の返答) 前時の一時間で、何も規制なく描くことをしていたので、「二時間目はイラストは無しね。」と声掛けしていた。一時間目でやりきったことが良かったのではないかな。

### 「指導助言」 (服部真也先生)

#### ◎「固まった形から～織物アート～」について

先生が、角度や向きをさかんに変えて作品を提示していたのが良かった。机間巡視しながらも、先生が作品を見る視点を変えながら子どもたちと話しているところも素敵だった。子どもたちが自分の作品に対する見方を考えようというきっかけになっていた。自分の作品をじっくり見る時間を設けていたことも良かった。展示の意図が高学年だからこそ、この向きで見てもらいたいというところを抑えていた。水の量は、少し多くても大丈夫。しっかり固めるために液体粘土を十分な量全体的につけ、ぎゅっとしっかりしぼると良い。使える材料をたくさん用意していたことが大事である。使いたいものがあることで、子どもたちは主体的になる。また、作品を固める時に使う土台や型となる材料は、使えるよと伝えるだけではなく、可能性を探れるように先生が提示してくことも大切である。一つの材料も使い方は色々あるということを見せることで、子どもたちの発想は豊かになる。液体粘土を使う季節は夏がおすすめ。画用紙・針金・板で世界観をもたせるのも良いが、高学年の知識では「バランス、配置、動き」を大切にしていきたい。例えば「ぶたに見える→○○しているぶたに見える」これを考えることで、着色が変わってくるし、高学年らしいものになる。しかし、一回の授業では使いたい！使える！という意欲を育てることは難しいので、今回の授業が今後のきっかけになったと思う。

#### ◎「墨と水から広がる世界」について

環境構成が素晴らしく、材料の組み合わせによる使い方や、材料の配置の仕方に工夫が見られた。前方においたり、散らして置いたりすることで何を使ってどのような表現をしたいのか悩む子どもたちが、材料を取りに行く途中で目に入った他の子の作品を見ることや、そこで始まる会話が鑑賞の時間になる。それらが、子どもたちへの作品づくりへの誘いになる。また、この学習では身体性から見られる活動で「技能」を評価することができた。綿をランダムにポンポンとしていた子が、位置を見ながら一回ずつポンとしている姿や、ビー玉を転がしていた子がビー玉とカップを組み合わせるくるくる回して表現している姿に創造的な技能が見られる。自分も、「この授業の中で技能を見よう」と決めた時は、作品を見るのは2割くらい、8割くらいは身体を見る。先生の、かがむ、しゃがむ、後ろから見る、目と手の間から見るという様々な見方が子どもたちを刺激していた。

班の形にする効果としては、友だちの作品や作品を作っている様子も見ることができる。また、前の子に墨を飛ばしてしまったら・・・と思うのであれば、「かざ

ぐるま型」がお勧め。そうすると、班の子だけでなく、背後のグループの子とも対話できたり、様子を見たりできる。

高学年の知識の中に配置・バランスが入っているが、どこで納得するかも大事である。図工には、「納得解」というものがある。（指導要領にはのっていないが）自分が納得できるところを見つけていく、正解は自分で見つけていくということ。この作品はここでちょうどいい、これがいい。そこを見つけれたら伸びしろが上がっていく。

表したいことを最初に見つけておいて迫る分野と、表したいことを試しながら広げていく分野があるが、導入や板書の量も全然違う。しかし、どちらの分野においても、子どもたちの意見を広げ、授業の中で手渡せるようにしていくと授業の質が変わってくると思う。

提案者	北川 紗絵	司 会	川上 寛子
	万野 裕香		
助言者	服部 真也先生	記 録	山下 仁美